日本SPF豚協会だより
Report of JAPAN SPF Swine Association 2010.7 第40号

提◆言

協会50年に向けて新たな一歩

日本ＳＰＦ豚協会副会長
全農畜産サービス㈱代表取締役　北島　克好

５月18日、宮崎県知事は口蹄疫「非常事態宣言」を発令し、現在、国内畜産業界はこれまでに例を見ない危機的な状況に陥っています。

終息どころか感染拡大を抑えることができず、初めての感染確認から３か月目に入ってしまうこととなりました。

５月の半ば過ぎ、さる新聞に「口蹄疫で農家　豚舎最新鋭も8,000頭犠牲　絶望越え再起誓う」との見出しで、30歳の養豚農家が農場に出入する際にシャワーを浴び、服もすべて着替えるなど10項目を超える衛生対策を実施していたにもかかわらず５月16日に発症した、との記事が掲載されました。施設を含む防疫の限界と虚しさともに、明日への希望を一瞬にして奪い去る「病気」のおそろしさに体が震えました。そして、それでもご本人の「再建に向けてがんばろう、つらいけど山を乗り越えよう」と再起を図る姿勢に、つい落涙してしまいました。

ＳＰＦ豚農場は、ここ10年の業界あるいは消費者の指向である「履歴が確かで、健康で衛生的な農場から生産された畜産物」として、養豚産業のなかで年々伸張し、発展してきました。

しかし、母豚数シェアでいけばここ数年、全国の繁殖母豚数で８～９％に留まっています。協会を発展させ、会員数を拡大するためにはどうすればよいのか、協会の理事会や生産者研修会等で、しばしば問題提起がなされ議論されています。

大別すると、「協会の声を大きくするためには会員数を増やすことが重要で、資格や認定要件の敷居を低くすべきだ」という意見と、「認定要件を厳格に審査し（第三者機関の導入も視野に入れる）、だめなところは再認定へのチャレンジを明確にして、数でなく質を上げるべきだ」という意見があり、ときに熱い議論がなされていますが、そのつど時間切れ・継続審議となり、結論には至っていません。

最近、新しく協会に加入される農場は、母豚1,000頭を超える大型農場も多くなり、最新鋭の施設・設備で飼育管理をシステム化、ＳＰＦ豚生産によって企業化した生産者の加入も増加してきています。そして、その優れた技術が協会を通して会員に普及される、新しい時代が到来しているといえます。

今回の口蹄疫は、日本の畜産の防疫に対する考え方を根本から見直す機会になったのではないか、と思います。畜種を越えてどうやってわが国の畜産を守っていくか、そこには大きな課題があることが浮き彫りになりました。こうした中、ＳＰＦ養豚の優位性と信頼性は群を抜くものと考えます。

柏崎　守・ＳＰＦ豚農場認定委員長は、本誌第37号の巻頭で、「協会会員の心のどこかにＳＰＦピッグ・プライド（ＳＰＦ豚を飼う誇り）が宿っていて、その誇りこそ発展への元気薬である」と記されています。

このことは、これまでの議論にひとつの終止符を打ち、協会50年に向かって新しい一歩をふみだす、まさに提言ではないかと私は確信します。

宮崎県で発生した口蹄疫の教訓

日本ＳＰＦ豚協会

今年４月下旬、宮崎県川南町を中心に発生した口蹄疫はわが国の畜産業界に大きな衝撃を与えました。５月に入ると本病の汚染は爆発的な広がりをみせ、６月10日現在、280農場（牛200農場　33,361頭、豚82農場152,871頭）が口蹄疫陽性と診断されました。

ここまで感染が拡大した最大の原因は、初期対応の不適切にあることが考えられます。４月９日に開業獣医師から、ある農場に口蹄疫特有の症状の牛が発見されたとの届出があったのに対して、県の担当者は「口蹄疫とは考えにくい」と判断して経過観察の処置をとりました。16日に同じ農場の別の牛に同様の症状が見られた際にも、アカバネ病など類似疾病の病性鑑定を優先し、19日になって初めて動物衛生研究所に口蹄疫のＰＣＲ検査を依頼し、20日に陽性と診断されました。

この間、どのような防疫手段（人や動物の移動、車両や器材の消毒など）がとられたか定かではありませんが、口蹄疫とは考えなかったことからすると、人や車、動物の移動はほとんど野放し状態であったろうと容易に想像できます。本病の潜伏期間が10日前後あることを考えると、この期間に取り返しのつかないほど感染が拡大してしまったと考えられます。

この問題は、家畜の防疫のあり方についていろいろ考えさせてくれます。それは、口蹄疫のような重大疾病の感染が疑われる場合、迅速、かつ適切な初期対応がいかに重要であるかということです。

現在川南町を中心とする地域では、あまりにも多くの農場に感染が広がってしまい、通常の防疫措置（家畜の殺処分と埋却）では対応できなくなり、ワクチンを利用した時間稼ぎを余儀なくされています。

一方、それと対照的なのが「えびの市」です。４月28日から５月13日にかけて４農場で口蹄疫陽性の家畜が見つかりましたが、いずれも診断の翌日には防疫措置を完了しました。このすばやい対応が、以後の感染を防ぎ、６月４日の口蹄疫終息宣言につながりました。

今回の口蹄疫発生と感染の急拡大は、家畜の防疫面で私共に大きな教訓をもたらしました。

さきに述べたように、重要疾病発生時の迅速な初期対応はもちろんのことですが、個々の農場で行なわれている日常の防疫管理がさらに重要です。今回の口蹄疫は、当初牛の感染拡大が目立ち、豚がそれに引きずられているかのようにみえました。それは、養牛と養豚、それぞれの関係者の防疫意識に大きな差があったためかもしれません。もし、ＳＰＦ豚認定農場のような防疫管理と、適切な初期対応がなされていれば、感染の拡大を抑制するか、あるいは阻止できたかもしれないのです。残念でなりません。

日本ＳＰＦ豚協会は、ＳＰＦ豚農場認定規則にもとづいて、防疫設備基準および防疫管理基準を定めています。会員の皆様方には、これら基準の持つ真の意味を理解し、さらなる農場防疫の強化に取り組んでいただきたいと思います。

今後、いつ、どこで、このような重大疾病が発生するかわかりません。その時、日常の的確な防疫管理が疾病の侵入を防ぎます。今回の口蹄疫発生とその対応策を教訓として、より高度な防疫管理のありかたを追求し、進化させていくことが、日本ＳＰＦ豚協会および認定農場の責務ではないでしょうか。

口蹄疫発生地区およびその周辺にはＳＰＦ豚認定農場がいくつかありますが、渦中にあったそれらの農場ではいずれも感染を免れていました。強固な防疫意識を持ち、認定基準を確実に守り続けていたことも大きな要因ではないかと思います。しかし、残念ながらワクチン接種と殺処分対象に指定された地域内にあるため、防疫措置対象となってしまった認定農場もあります。本当に悔しい思いで一杯です。心からご同情申し上げると共に、１日も早く再起されることを祈ります。そして、今なお拡大阻止・終息に向け、奮闘・努力されている宮崎県の生産者および関係者各位に心よりお見舞い申し上げ、一日も早い終息を念じております。

（日本ＳＰＦ豚協会会長　赤池　洋二）

連載
豚の細菌病⑪

豚サルモネラ症①

東京農業大学教授 山本 孝史

はじめに

豚のサルモネラ症は、*Salmonella* Choleraesuis (SC)を原因とする敗血症と、*S.* Typhimurium (ST)による下痢症、およびその他の血清型による感染、の３つにわけられます。SC感染による敗血症では、食欲不振、発咳、発熱がほぼ共通して認められ、重症例では耳翼、鼻端、下腹部が著しいチアノーゼを呈して４～５日の経過で死亡します。普通は下痢や軟便はみられませんが、時には頑固な下痢が主な臨床症状で、削痩して約３週間の経過で高い死亡率を示すようなこともあります。一方ST感染症では、下痢・削痩を主徴とし、その他の症状は顕著ではありませんが、SC感染症のように発熱、衰弱して死亡し、下痢はあまりみられない場合もあります。すなわち典型的には、SC感染症は、肺炎を伴った急性の敗血症であり下痢はあまり認められないのに対し、ST感染症は下痢症であり、肺炎や敗血症は認められません。そして時として病原体が入れ替わったかのような非定型的な発症例が認められることがあります。SCやST以外では、*S.* Enteritidis (SE)による子豚の敗血症例や成豚の下痢症例が報告されていますがまれな例です。

Kishimaら（2008）は、野外の健康豚の糞便からST以外にAnatum、Derby、Havana等、20血清型を分離しています。同様の成績は、米国やデンマークからも報告されています。このように、豚の糞便からはSTをはじめ多くの血清型が分離されますがSCは分離されません。豚に病原性を示すのは前述のようにSCおよびSTがほとんどであり、糞便から分離されるその他の血清型の豚に対する病原学的意義はほとんどありませんが、ヒトの食中毒の原因とはなり得るので公衆衛生上は無視できません。

発症要因

SCは、豚を固有宿主とし、野外では肺炎をともなった死亡率の高い急性敗血症を惹起し、感染実験においても同様の病型が再現できる等、豚から分離されるサルモネラの中では最も病原性が強い血清型です。しかしこのようなSCでも最初に分離されたのが豚コレラ罹患豚からであり、当初はその病原体と考えられたことに象徴されるように、日和見感染症的な色彩が強い病原体でもあります。STは健康豚の盲腸内容や糞便から分離されることから明らかなように、感染したからといって直ちに下痢を惹起するものではありません。すなわち、宿主が感染しやすくなる（易感染化）ような要因、すなわち、密飼、輸送等のストレスや他の病原体の感染があって初めて発症します。中でも他の病原体感染は発症要因として重要であり、下痢の認められる例では、豚鞭虫、豚腸結節虫、バランチジウム、コクシジウム等の寄生虫との混合感染例が多数報告されています。また、SCやSTによるサルモネラ症の発症とPRRS感染との間に関係があるのではないかと考えられる野外観察例が多数報告されています。しかし、PRRSウイルスとSCを経鼻接種した場合、PRRSウイルスはSCの病原性を強めなかったという報告や、PRRSウイルスが侵入しても豚群のサルモネラ感染率が上昇しなかったという相反する報告もなされています。一方、SC、PRRSウイルスおよびストレス（デキサメサゾン投与）の３つを組み合わせた感染実験を実施すると、３者が揃ったときに７頭中３頭が死亡する重篤なサルモネラ症が発症するという実験結果（Wills et al. 2000）が報告されたことから、これらの相反する報告はストレスという第３の要因の多寡によるものだったと考えられます。このようにサルモネラ症の発症には、ST、SCを問わずストレス因子がきわめて大きな要因となります（以下次号）。

＜参考文献＞

Kishima, M., et al. (2008): Nationwide surveillance of Salmonella in the feces of pigs in Japan. Zoonoses and public health, 55, 139-144.

Wills et al. (2000): Synergism between porcine reproductive and respiratory syndrome virus (PRRSV) and Salmonella choleraesuis in swine. Veterinary microbiology, 71, 177-192.

口蹄疫発生を考慮、定時総会は書面表決に

事業計画など全ての議案を承認

本年度の定時総会（代議員会）は6月10日、東京都千代田区のＫＫＲホテル東京において開催の予定でしたが、この度の口蹄疫発生を受け、万全を期すために畜産関係者が一堂に会する機会を避けるべきであるとの判断から、急遽書面表決による総会に切り換えさせていただきました。代議員の皆さんのご協力により昨年度の事業経過および決算報告、代議員改選案、今年度の事業計画および予算案などすべての議案が承認されました。概略は次の通りです（会員の皆さまには議案および議事録をすでにお送りしてあります）。

21年度事業経過報告

平成21年度、日本の景気は「底打ち感」から「緩やかな回復局面に入る」とされましたが、11月には民主党新政権が日本経済はデフレ状態にあるとしました。量販店では価格を下げても物が売れない状態が続いています。養豚業界でも、年度当初から相場が上がらず、９年ぶりの安い相場となりました。飼料価格は高位安定のままです。取り巻く環境は一向に回復の兆しを見せません。

このような中、日本ＳＰＦ豚協会は設立40周年という節目の年となり、記念事業として記念セミナーの開催、記念刊行物の制作などの事業を行いました。

記念セミナーは、横浜情報文化センター（情文ホール）で記念式典とともに開催し、150名の参加を得て、40周年を飾るにふさわしいものとなりました。また、記念刊行物は『ハイヘルス養豚への挑戦―健康優良豚ＳＰＦ豚40年の軌跡と将来展望』と題した技術本として完成、近々本格的な販売が開始されます。

一方、ＳＰＦ豚農場認定制度を柱とした各事業にも取り組みました。厳しい養豚環境の中で、認定申請を見送る農場もある一方、新規申請もあったことから、認定農場数は187（ＧＧＰ・ＧＰ農場20、ＣＭ農場167）と横ばいながら飼養母豚数は78,178頭と増加しました。生産成績では、１母豚あたり年間肉豚出荷頭数が改善されていますが、肉豚出荷率は悪化傾向にあります。

また、今年度事業としての、新たなテーマによる地域研修会は、東京（関東・北信越地区）のみの開催となりました。

新たに取り組んだ事業が、日本食肉流通センター主催の「ちくさんフードフェア」への出展です。このフェアは川崎みなとまつりとの共同開催で毎年秋に行われているもので、昨年も２日間で9万5,000人の来場者がありました。協会で実施したＳＰＦ豚肉のしゃぶしゃぶ、モモ肉炭火焼、生ハムの試食は好評を博し、長蛇の列となりました。また、来場者を対象にアンケートも実施し、2,000枚を超える回答を得るなど、各ピラミッド・生産者のご協力をいただいて大きな成果をあげられたと思います。

事業の柱の一つである認定シールの販売は848万3,000枚（前年度比80.3%）と、前年度を大きく下回りました。協会オリジナルキャップとＴシャツは引き続き販売しております。

ポークリーフレットは新たに第３弾を制作、希望者へ配布しました。

協会だよりは予定通り35号、36号、37号、38号を発行いたしました。

なお、今年度は、40周年記念事業に係る支出やシール収入の減少等により赤字決算となりました。

代議員の改選

今年度は協会代議員の改選時にあたります。第２期代議員および役員は次の方々です（順不同、敬称略）。

＜地域選出＞山中茂樹（再任、㈲山中畜産）、日浅文男（再任、理事、㈲道南アグロ）、高橋正（新任、㈲ケイアイファウム）、石川輝芳（再任、理事、(農)しわひめスワイン）、工藤修（新任、監事、全農畜産サービス㈱東日本原種豚場）、高橋充好（新任、㈲胆沢養豚）、林寛康

（再任、理事、㈱林商店）、下山正大（再任、理事、㈲下山農場）、宮澤光男（新任、宮澤光男養豚場）、高木敏行（新任、㈲東海ファーム）、細谷　浩（新任、㈲ほそや）、大場亮介（新任、マルス農場）、中平正英（再任、長野県農協直販㈱ＳＰＦ種豚センター）、本野憲一（再任、監事、㈱ユキザワ）、船本秀和（新任、理事、㈱西日本ジェイエイ畜産）、平芳紘（再任、㈲芳寿牧場）、西原登（再任、理事、㈱ファームテック）、大和建一（再任、㈲やまとんファーム）、高森省吾（新任、㈲高森農場）

＜ピラミッド選出、理事＞北島克好（全農畜産サービス㈱）、秦政弘（㈱サンエスブリーディング）、渋谷清昭（㈱シムコ）、岩崎和也（伊藤忠飼料㈱）、山内一広（ホクレン）、尾関紳一（日本農産工業㈱）

＜会員外理事＞赤池洋二・藤田世秀（協会）

22年度事業計画

防疫設備基準、防疫管理基準の徹底

19年度から実施している農場の改善指摘については、２～３農場が改善継続中ですが、それ以外の農場は改善を完了しました。今後もさらなる基準遵守の徹底を図ります。

ＳＰＦ豚農場認定規則改定案および関連する基準・細則改定案の印刷と配布

6月の認定委員会より、新基準における認定審査を行います。

認定委員会の開催

ＳＰＦ豚農場認定事業を推進していきます。認定委員会は例年どおり、６、９、12、３月の計４回開催します。

認定委員会の独立性の強化

認定委員会の独立性と権限強化を図るべく、引き続き検討していきます。

認定成績集計結果のフィードバック

引き続きＳＰＦ豚農場認定申請にともなって提出される生産成績を集計して、認定書発行時にこれまでの成績の推移を、また、年度末に各認定項目の順位表を、各ピラミッドを通じて農場にフィードバックしていきます。ベンチマーキングに活用して農場成績の改善に役立ててもらいたいと思います。また、地域研修会等でも検討会を持ちたいと思います。

生産成績優秀ＣＭ農場の表彰

例年通り、生産成績優秀ＣＭ農場を選考委員会により選定、セミナーで表彰します。また、選考基準、表彰の対象項目等について、選考委員会で検討を加えていきます。

地域研修会の継続開催

口蹄疫の発生を受け、4月28日（水）に予定していた九州・中四国地域研修会を中止（延期）しました。今後の開催については、鎮静状況を見ながら検討します。

協会だよりの発行

協会だより39号（４月）、40号（７月）、41号（10月）、42号（１月）を発行します。

協会パンフ・販促用資材の制作と普及

要望の多い協会パンフレット改訂版の発行を予定しています。また、店頭用ポークリーフレットを引き続き希望会員に無料で配布いたします。さらに、認定農場向け協会オリジナルキャップとＴシャツの販売を継続いたします。

ＳＰＦ豚セミナーの開催

口蹄疫の状況をみながら、開催の是非と内容について検討していきます。

イベントへの参加

１）日本食肉流通センター主催の「ちくさんフードフェア」（10月９、10日）に参加します。

２）日本食肉消費総合センター主催の「国産食肉まつり」に参加を検討いたします。

ＳＰＦ豚肉に対する正しい知識の普及

昨今、食の安全に対する関心の高まりに乗じて、必要以上にＳＰＦポークの安全性を誇張した文言が食肉流通業界で目に付くようになっていますが、日本ＳＰＦ豚協会としては、すべての会員が一致協力してあらゆる機会をとらえ、ＳＰＦ養豚の仕組みと生産情報がわかるような正しい「ＳＰＦポークに関する知識の普及」に努めます。

その他

ＳＰＦ養豚の普及と会員農場の増加のため、ピラミッドと共に努力を重ねる一方、生産されたＳＰＦポークの販売促進に向けた会員の努力を応援することに努めます。

◆先進的ＳＰＦ豚農場紹介◆

農事組合法人八幡平ファーム（岩手県洋野町）

常務理事大泉　俊昭

大泉俊昭（おおいずみとしあき）
昭和62年岩手大学農学部獣医学科卒業、全農入会。平成16年退職、秋田県の八幡平養豚組合へ。平成18年、母豚1,630頭の最先端設備を備えた八幡平ファームを立ち上げ、長年の夢であった農場経営を実現させた。平成21年4月には肉豚週800頭出荷体制となり、その成績は全国でもトップクラス。日本養豚界のニューリーダーとして期待されている。

「日本から養豚はなくならない。養豚農家として生き残るには日本で上位の経営状態であること。日本で上位の技術成績を残していること。そのためには職員の“やる気”が大事」というのが、当組合の阿部日出夫組合長の方針です。

農場経営では、売上のほとんどが肉豚の販売です。中物よりも上物が多い方がいい。上物にプレミアがつけばもっといい。有利販売してもらうにはどういうものがいいのか。

年間４万頭の肉豚を出荷する立場からすると、「うちの豚はさしが入ってます」といったことをいくらいっても多分売れない。それよりも、枝肉でつるしたときに、ネックの位置がピタッと揃う豚を出した方がいいわけです。

おいしいとか、やわらかいは当然のことですが、枝肉として品質が揃ったもの、90％の豚が枝重70～78kgの間に入ればいいと考えています。つまり、肉の販売に携わる人が売りやすい荷姿をつくることも、特にロットが大きい生産者としては、有利販売のためにも必要だと思います。

そのためには何をやればいいのか。荷姿が揃わないのは肉豚担当者だけの責任ではありません。種付担当の責任でもありますす。なぜなら、たとえば今週は50腹、次は100腹、その次は70腹種付しました、ということになると、毎週出荷する頭数がばらばらになります。そこで選畜を、といわれても、揃えられるわけがない。

たとえば種付担当が毎週85腹ピタッと種付できれば、基本的には肉豚が毎週800頭前後出てくるはずです。ずれても50頭前後です。そうすれば肉豚担当の選畜が容易になり、販売担当者も売りやすいはずです。

肉豚成績が最終目標ではありますが、それは種付段階から始まっていることであって、肉豚段階だけを「なぜ結果が出せないのか」と怒ってもだめなわけです。

農場では、担当ごとに「ノルマ」と「重要項目」があります。ノルマ達成には個人表彰があり、賞金も出します。ですからみんな必死です。

種付担当のノルマは**分娩率93％**で、重要項目は**種付85腹／週**です。ちなみにここ７週間の種付は85腹か86腹、そこからずれたことはありません。今後もまずないと思います。

分娩担当のノルマは**離乳率94.5％**ですが、実際は**95％以上**です。ここは**何が何でも下痢を出さない**というのが重要項目です。

子豚担当にはノルマはありませんが、重要項目は**換気・温度管理**です。施設面からみると、使いこなしさえすればほとんど事故がなく増体もいいはずなので、やはり微妙なのは換気と温度管理です。機械には頼れない、人の体感温度で決めていくしかない。微妙にずれれば簡単に成績が落ちます。その感覚が重要です。

肥育担当は、**70～78kgの枝重適合率88％**がノルマです。これはやろうと思ってもなかなかできないと思いますが、実際は93％前後で推移しました。記録を達成すると私がその部門にごちそうしなければならないというルールがあるのですが、２か月連続で肥育担当にごちそうしたことがありました。

重要項目は**選畜方法**です。これが勝負です。800頭の出荷に対し３人で行っています。実質２人のときもあります。

また、**リキッドフィーディングの早期回復**も重要項目です。トラブルがあったときにどれだけ短い時間で直すかということです。機械が悪いと文句をいうひまがあったらどうすれば早く直るかを考えようと。早く修復できれば、増体に影響が出ずにすみます。

一番厳しいのは**場長**のノルマ「**成績日本一**」です。重要項目は日常的な職員の管理です。技術的なこともそうですが、職員をどうみるかが最重要項目になります。

組合長の方針に対して、全職員が同じ方向を見ながら進まないと、目標が達成できないからです。

（以下次号）

ＳＰＦ冷しゃぶラーメンサラダ

●レシピ提供・いのこ家シェフ　小貫健介

レシピコーナーがリニューアル！今号からおなじみ、北海道認定農場産ＳＰＦポークの専門店「いのこ家」各店のシェフから、リレー方式でレシピを提供いただくことになりました。
まずは手軽で涼しげな、冷しゃぶとラーメンを使ったサラダです。

●材料●（3人前）

ＳＰＦローススライス肉　120g
ラーメン　3玉
レタス　1／2個
トマト　1／2個
ごまドレッシング　適宜
白ごま　少々
みょうが、かいわれ大根などの
香味野菜（お好みで）　適量

●つくり方●

① 鍋に水を入れて沸かし、豚肉を軽くしゃぶしゃぶして、冷水に落とします。
② レタス、トマトを食べやすい大きさに切ります。
③ ラーメンを指定時間通り茹でて冷水で麺をしめ、水をしっかり切ります。
④ お皿にレタスを敷き、麺をのせ、冷しゃぶとトマトをもりつけ、ごまドレッシングをかけます。
⑤ 白ごまを振りかけて出来上がりです。
⑥ お好みでみょうがやかいわれ大根などの香味野菜を添えるとさっぱりとした味わいになります。

【シェフからひとこと】
サラダ感覚でいただく夏らしい豚肉の冷麺です。冷しゃぶをつくるとき、お湯を沸騰させず70℃くらいの温度でくぐらせるとお肉がやわらかく仕上がります。

●認定情報●

●平成22年度認定農場

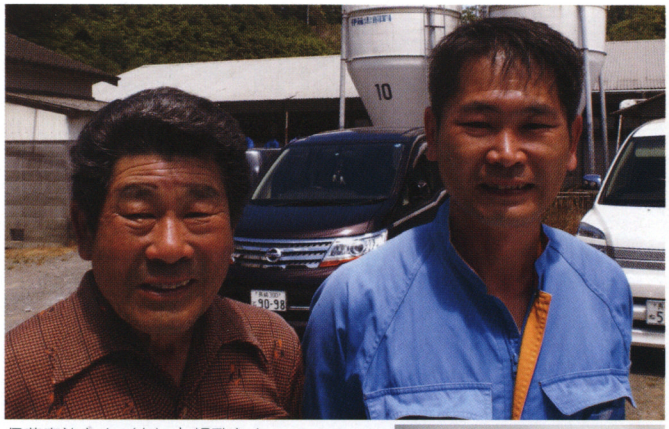
[6月認定]（有効期間：平成22年6月3日から23年6月30日まで）

北海道・㈲鈴木ビビッドファーム、青木ピッグファーム、㈲ゲズント農場、**青森県**・カワケンＳＰＦファーム、同第三農場、**岩手県**・ＦＶファーム、**秋田県**・㈱ナカショク八竜繁殖農場、同大口繁殖農場、同能代離乳農場、**山形県**・㈱ナカショク庄内繁殖農場、同庄内肥育農場、同鶴岡肥育農場、**福島県**・㈱フリーデン都路牧場、㈲東和牧場、**茨城県**・㈲奥田農場、㈲弓野畜産繁殖農場、同八郷農場、同千代田農場、㈲篠崎畜産、**群馬県**・ＪＡ東日本㈱利根スワインファーム、**栃木県**・㈱ノイバーン、**千葉県**・石毛宏司養豚、岡野朝雄養豚場、高橋幸雄養豚、塚本利昭養豚場、宮澤光男養豚場、㈲アグリ、吉田道養豚場、㈲藤崎農場松尾繁殖農場、同飯岡肥育農場、江波戸ＳＰＦ農場、㈲下山農場第２農場、**新潟県**・㈱ナカショク荒川繁殖農場、同中条離乳農場、同下田肥育農場、同長峰肥育農場、同上中山肥育農場、**静岡県**・㈱マルス農場、**兵庫県**・(農)八鹿畜産河上農場、同小田垣農場、**鳥取県**・㈱西日本ジェイエイ畜産名和農場、**岡山県**・岡山ＪＡ畜産㈱荒戸山ＳＰＦ農場、**愛媛県**・冨永養豚場、旭養豚場、㈲多田ファーム、**佐賀県**・ＪＡさが富士天山ファーム、**長崎県**・ＪＡ全農長崎県本部五島種豚供給センター、㈲伊藤ファーム、浜田養豚、**宮崎県**・㈲レクスト、江夏商事㈱御池農場、クリーンファーム㈱、**鹿児島県**・㈱かいたく大口農場　（以上53農場）

※次回認定委員会は平成22年9月9日（木）の予定

SPFのひと

㈲伊藤ファーム
伊藤　春治さん
伊藤　暢啓さん
●長崎県南島原市


伊藤春治さん（左）と暢啓さん
右が長崎じげもん豚ののぼりの写真

親子二代で
こだわりの「じげもん」豚肉生産

㈲伊藤ファームは、長崎県の島原半島にあり、普賢岳の裾野にひろがる雄大な土地にある農場です。今回は、伊藤春治会長と伊藤暢啓社長のお二人にお話をお伺いしました。

創業者である春治さんは昭和14年生まれの71歳。昭和40年に母豚４頭からスタートされ、現在は320頭規模に。息子の暢啓さんに実質経営を譲られた後もまだまだ現役、豚舎にも入られています。趣味はゴルフ、釣り、そして仕事だそうです。

暢啓さんは昭和41年生まれの44歳。美しい奥様と娘さん２人に囲まれて、私にはうらやましい限りです。趣味は同じくゴルフ、釣りと、地の利を生かした楽しみ方をされています。ゴルフのスコアもまたうらやましい！それでも「一番の趣味は仕事」とおっしゃいます。

そんな趣味も笑顔もそっくりなお二人、仕事の目標も同じ、つまり「豚に健康に育ってもらいたい」という思い、それがＳＰＦ豚導入となりました。健康に育ておいしい豚肉にするというコンセプトをお持ちです。

そして、生まれたのが「伊藤さんちのＳＰＦ豚、長崎じげもん豚」。ちょっと長い名前ですが、これにもやはりこだわりがあります。この「じげもん」は地元の言葉で「地元の物」あるいは「地元の者」を言うそうです。島原の人間が、島原で健康に育てたこだわりの「じげもん豚」、風味が豊かと好評で、生肉・加工品とも売行きが大変よいそうです。インターネットでも購入できるそうですが、博多駅の筑紫口にある暢啓さんの弟さんが経営する海鮮居酒屋「治之家（はるのや）」さんでも食べられます。

今後の目標は、母豚400頭への拡大。また、豚の健康に細心の注意をはらい、薬をできるだけ使わずに豚を作り上げていくこと。経営を安定化させるという理由もあるのでしょうが、言葉の端々に出てくる「消費者に喜ばれるように」という想いが根底にあるようです。規模拡大は、「じげもん豚」が手に入らないというお客さんの声に応えるためですし、健康に育てることは豚肉のおいしさに繋がります。

そんなお二人の思いやりと、島原のすてきな気候のおかげで、たいへん心地よいお話ができました。

（伊藤忠飼料㈱　宮井　宏泰）

編集後記

今回の口蹄疫では、重要疾病発生時の初期対応がいかに重要か身につまされました。報道で生産者の惨状を目の当たりにすると、なぜここまで被害が深刻になったかと、憤まんやるかたないものがあります。宮崎県の生産者および関係各位に心よりお見舞い申し上げ、一日も早い終息を願っております。他の地域の生産者の方々も、もう一度防疫対策を確認してみましょう。目に見えない微生物汚染だけに、慣れによる見落としが一番やっかいです。真摯な取り組み姿勢を再確認するときです。自分一人の問題ではないということを胆に銘じましょう。協会だよりもおかげさまで10年、40号をお送りすることができました。今後ともよろしくお願いいたします。（世）

日本ＳＰＦ豚協会認定農場産シール
このマークは
日本SPF豚協会の
登録商標です

日本SPF豚協会だより
第40号　2010年7月1日発行（季刊）
発　行　一般社団法人 日本ＳＰＦ豚協会
〒101-0032　東京都千代田区岩本町1-8-2
TEL.03-5835-5375　FAX.03-5835-5376
e-mail：j.spf.a@nifty.com
http://www.j-spf.com/
発行人　赤池　洋二
編集人　藤田　世秀